＜査読論文＞

アルフリッチの『文法』11世紀写本間言語変異

－３人称複数主格代名詞を中心に－

Linguistic Variation among the Eleventh-Century Manuscripts of Ælfric's *Grammar*
-With Special Reference to the Forms of Third Person Plural Nominative Pronoun-

市川 誠
（東京理科大学 教養教育研究院 北海道・長万部キャンパス教養部）
Makoto Ichikawa
（Tokyo University of Science, Institute of Arts and Science, Hokkaido-Oshamambe Division）

１．はじめに

古英語期に書かれた作品には複数の写本で現存しているものが数多くある。[1] ある写本が刊行本で使用される基底写本として選ばれると、その他の写本の言語情報は、顕著な変異形のみ刊行本の脚注に記録され、代名詞や屈折語尾のような本文解釈に関連の低い言語項目の変異形は脚注に記録されない傾向にある。[2] しかし、Laing（1992: 568）が指摘するように、同時代の異なる地域で製作された写本の比較は、方言間の音韻、形態、語彙、統語の違いを、また、異なる時期で製作された写本の比較は、時代間の言語変化を明らかにする。その出現頻度の高さのため、代名詞は写本間における言語の方言差、時代差を示す十分な証拠を提供することが期待されるが、[3] 刊行本やそれに基づく電子コーパスで基底写本とは異なる写本での生起を調べることができない以上、写本毎の代名詞の出現頻度を包括的に調べるためには、一次資料である写本に直接当たり、転写テキストに基づくデータベースを作成するしか方法はない。[4]

後期古英語期を代表する散文作家アルフリッチ（Ælfric c.950-c.1010）が書いた作品の一つに『文法』（*Grammar*）がある。11世紀に製作された『文法』の現存する写本数は13である。断片写本を除く９つの主要写本の言語を読むと、全般的に屈折語尾と強勢母音の表記における標準化が特徴である後期ウエストサクソン（Late West Saxon）方言に基づいた「古英語標準語」（Standard Old English）で書かれている（Gretsch 2009）。しかし、各写本の言語を詳細に検討すると、古英語標準語から仄かに垣間見える言語変異が少なからず観察される。[5] そのような言語変異を顕著に示すものとして３人称複数主格代名詞が挙げられる。このことについて、筆者は市川（2021）で次のように述べた。

（１）標準的な語形*hi*と共にSt. John's College 154写本で18例現れるこの代名詞（筆者注 *hig*）は、筆者の調査によれば、Cambridge, University Library, Hh.1.10写本で215例、Cambridge, Corpus Christi College 449写本で132例と比較的高い頻度で現れるのに対して、London, British Library, Harley 3271写本では用例がなく、その出現頻度は写本間で対照的である（出現頻度が写本間で有意な差を示しているにもかかわらず、代名詞*hig*は、恐らくはその用例数の多さのためか、Zupitzaの脚注では97ページと274ページの２箇所でしか触れられない）。
（市川 2021: 212）

上記引用で筆者が指摘したように、刊行から144年経過した現在においても『文法』の唯一の刊行本であるZupitza（1880）は代名詞*hig*について脚注でほとんど述べていない。また、『文法』の各写本における*hig*の出現頻度だけでなく、11世紀に存在が確認される３人称複数主格代名詞のその他の変異形*heo*、*hy*、*hyg*、*hyo*のそれについても不明である。

このような11世紀の写本で観察される非標準的な言語要素について、Campbell（1959）は、写本が製作された地域や場所が明らかな場合でも、特定の地域や場所の方言要素に帰することはできないと指摘する。[6] しかし、11世紀に製作された『文法』の写本、特に、書き写された地域が知られている写本の言語変異を記録することで、それが地域特有の方言要素と断定することはできないにせよ、非標準的な語形の分布が写本単位で明らかとなる。また、同じ地域で書き写された他の写本でも同様に確認される非標準的な言語要素の存在を考慮に入れることで、[7]『文法』の写本が書き写された地域に広く見られる共通の言語特徴が浮き彫りになると同時に、各地域での『文法』の言語の伝播、受容の仕方について新たな知見が得られることが期待される。[8]

上記引用（１）の記述をした時点で、筆者の調査範囲は『文法』の４つの写本に限定されたものであったが、現在、筆者は11世紀の主要写本９つの転写を完了している。従って、筆者が作成した転写テキストをコーパスとして、『文法』の11世紀写本における３人称複数主格代名詞の分布、頻度を調査することが可能である。本稿の目的は、写本が製作された地域を念頭に置き、アルフリッチの『文法』11世紀写本間言語変異として３人称複数主格代名詞に焦点を当て、11世紀の主要写本９つの写本におけるその分布、頻度を調査し、調査結果を提示することである。本稿の調査方法として、Zupitzaの『文法』本文で233例確認される３人称複数主格代名詞を基準とし、各写本で対応する箇所に出現する語形を集計する。[9] なお、調査対象から３人称複数主格代名詞と同じ語形である３人称複数対格代名詞と３人称単数女性対格代名詞を除外しているので、本稿の*hig*の調査結果は、語形を基準に集計をした上記引用（１）の結果と異なることに注意されたい。また、Cambridge, Corpus Christi College 449写本やLondon, British Library, Harley 107写本のように、テキストの欠落のために、調査対象のかなりの部分に対応箇所がない写本があることにも留意されたい。[10]

２．各写本における３人称複数主格代名詞の分布

本節では『文法』の11世紀の主要写本９つの概略を紹介し、当該写本における３人称複数主格代名詞の分布について調査結果を提示する。各写本の記述は、Ker（1957）、Doane（2007）、Gneuss and Lapidge（2014）などの先行研究に依拠する。なお、写本の提示順は、『文法』の基底写本であるOxford, St John's College 154写本を除き、Cameron（1973）のそれに従う。また、写本の表記法についてはGneuss and Lapidge（2014）、写本の省略形についてはZupitza（1880）に従う。

2.1 Oxford, St John's College 154写本

Oxford, St John's College 154写本（以下O写本と略す）は、10世紀後半から11世紀初頭に製作された写本である。O写本は、最も古く最も完全な形の『文法』のテキストを含む写本である（Ker 1957: 436; Doane 2007: 83）。[11] 12世紀から1611年まで、O写本はダラム（Durham）大聖堂に所蔵されていたが、そのplace of originは不明である（Ker 1957: 437; Gneuss and Lapidge 2014: 518）。以下がO写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表１　O写本における３人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	対応箇所なし
218	13	2

Zupitzaの刊行本の言語を読むと、当該代名詞に関しては、母音長音記号の付加を除き、O写本を正確に転写したものと評価することができる。しかし、刊行本とO写本を比較すると、O写本では刊行本93ページ15行目と116ページ７行目の箇所が欠落していることが分かる。Zupitzaは欠落箇所を*hi*で補っているが、それは他の写本から補充したものである。[12] なお、O写本で13例使用される*hig*に関して、そのうち10例が「代名詞」の章で集中的に現れるのが注目に値する。[13]

2.2 Cambridge, University Library, Hh.1.10写本

Cambridge, University Library, Hh.1.10写本（U写本）は11世紀後半の写本である（Ker 1957: 22）。現在の学術的見解によれば、この写本は、エクセター（Exeter）司教レオヴリッチ（Leofric d. 1072）の時代に、エクセターで製作されたものである（Gneuss 2003: viii; Treharne 2003: 161; Gneuss and Lapidge 2014: 28）。U写本の言語の特徴として、３人称複数主格代名詞*hig*の多用を挙げることができる。表２はU写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表２　U写本における３人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	*hy*	対応箇所なし
17	202	10	4

表２から明らかなように、U写本では*hig*の使用が圧倒的である。この調査結果は、標準的な語形*hi*を多用するO写本とは対照的である。他方、U写本では*hig*に加えて*hy*の使用が10例確認された。U写本と同じくエクセターで製作された写本の一つにCambridge, University Library, Ii.2.11写本がある（Cross 1997: 49）。この写本は*Gospel of Nichodemus*と*Vindicta Salvatoris*（*the Avenging of the Saviour*）を収録しているが、いずれも*hig*を多用する作品として知られている。[14] Cambridge, University Library, Ii.2.11写本と共にU写本で*hig*が多用されていることは、エクセター特有の言語要素と断言できないにせよ、*hig*が南西部方言要素の可能性を示しているという点で興味深い。[15]

2.3 Cambridge, Corpus Christi College, 449写本

Cambridge, Corpus Christi College, 449写本（C写本）は11世紀前半に製作された写本であり、その製作地域は不明である（Ker 1957: 121）。写本の前半部である ff.1r-41vのテキストは16世紀にBritish Library, Royal 15 B.xxii写本から補充されたものである。従って、調査範囲を当該写本の写字生が書き写したf.42rからf.89rに限定する。C写本で使用される３人称複数主格代名詞の語形は以下の通りである。

表３　C写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	*hy*	*hyg*	対応箇所なし
31	131	1	1	69

U写本と同じく、C写本においても*hig*の出現頻度は非常に高い。３人称複数主格代名詞に関するこの写本の特徴として、11世紀に製作された『文法』の写本で唯一、*hyg*の語形が確認されることである。*Dictionary of Old English Web Corpus*の検索結果によれば、*hyg*の語形は69例確認され、そのうち24例が３人称複数主格代名詞で使用されている。11世紀に製作されたすべての写本における３人称複数主格代名詞の網羅的、体系的な調査が終了した暁には、*hig*と*hyg*は共にC写本が製作された地域を示唆する言語証拠となることが期待される。[16]

2.4 Durham, Cathedral Library, B.III.32写本[17]

Durham, Cathedral Library, B.III.32写本（D写本）は、ダラム大聖堂図書館に所蔵される11世紀前半に製作された写本であり、*Hymnal*（ff. 1r-43r）、*Proverbs*（ff.43v-45v）、*Canticles*（ff.46r-55v）を収録する同時代の別の写本と

合冊されている。写本上にあるさまざまな証拠から、合冊された２つの写本は共にカンタベリー（Canterbury）との結び付きが指摘されている（Ker 1957: 147; Keffee 2007: 59; Gameson 2010: 12, 47-48）。また、Gneuss（1997:47-8）はこの写本を「南東部方言の綴りが多かれ少なかれ頻繁に現れる」（with south-eastern spellings occurring more or less frequently）写本と指摘する。表４はD写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表４　D写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	*hy*	*heo*	対応箇所なし
217	6	1	4	5

先述のU写本、C写本とは異なり、D写本では標準的な３人称複数主格の語形である*hi*の使用が圧倒的であり、非標準的な語形の出現頻度はきわめて小さい。D写本の特徴として、D写本と同じく南東部方言の結び付きが指摘されるLondon, British Library, Harley 107写本と共に、３人称複数主格の語形*heo*が４例確認される。

2.5 London, British Library, Cotton Faustina A.x写本

大英図書館（British Library）にはアルフリッチの『文法』の11世紀の写本が、断片を含め７つ現存する。Cotton Faustina A.x写本（F写本）はそのうちの一つであり、11世紀後半に製作された写本である（Ker 1957: 194; Doane 2007: 1）。D写本と同じく、F写本も合冊された写本である。合冊された写本後半部は12世紀に製作され、『ベネディクト派戒律規則』（*Benedictine Rule*）や『まじない』（*Charms*）を収録する。なお、F写本の製作地域は不明である。表５はF写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表５　F写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	*hy*	対応箇所なし
208	2	2	21

F写本では標準的な語形である*hi*の頻度が208例と圧倒的である。

2.6 London, British Library, Cotton Julius A.ii写本[18]

Cotton Julius A.ii写本（J写本）は11世紀から12世紀にかけて製作された３つの異なる写本が17世紀に合冊されたものである。アルフリッチの『文法』は11世紀半ばに製作された２番目の写本（ff.10r-135v）に含まれる。Gneuss（2001: 64）やDoane（2007: 17）が指摘するように、２番目の写本には、アルフリッチの『文法』と共にアルフリッチの『語彙』（Glossary）（ff.120r17-130v22）と『ラテン語動詞論』（Treatise on Latin Verbs）（ff.130r1-135v5）が収録されている。『文法』の基底写本であるO写本とは異なり、J写本はラテン語版序文、古英語版序文、音韻論の箇所が欠落しており、『文法』のテキストはZupitzaの刊行本６ページ４行目に対応する文字論の途中から始まる。J写本は南東部方言との関連が指摘される写本であり、市川（2021）で、筆者はJ写本における南東部方言要素として（１）ウエストサクソン方言の*e*に対応して使用される*æ*（２）ウエストサクソン方言の*ea*に対応して使用される*æ*（３）ウエストサクソン方言の*y*に対応して使用される*e*（４）ウエストサクソン方言の*ie*に対応して使用される*e*（５）無声摩擦音の有声化を指摘した。表６はJ写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表６　F写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hy*	対応箇所なし
210	7	16

これまで扱った５つの写本とは異なり、F写本では*hig*が全く現れないのが特徴である。

2.7 London, British Library, Harley 107写本[19]

Harley 107写本（H写本）は11世紀半ばに製作された写本である（Ker 1957: 303; Doane 2007: 21）。この写本はケント方言地域、恐らくはカンタベリーで製作されたと想定される。市川（2020）で、筆者はH写本に特徴的な言語変異として（１）変則動詞*beon*の３人称複数現在直説法の語形である*siondon*と（２）短母音 *a*＋鼻子音＋*i* ウムラウトを挙げ、この２つの言語特徴は12世紀の写字生Eadwineがカンタベリーで書き写した*Canterbury Psalter*でも観察されることを指摘した。H写本と*Canterbury Psalter*との共通点は３人称複数主格形にも当てはまる。H写本では*Canterbury Psalter*に特徴的な３人称主格代名詞の語形*hyo*が１例確認された。

表７　H写本における３人称複数主格代名詞の分布[20]

hi	*hig*	*hy*	*hyo*	*heo*	対応箇所なし
150	30	2	1	1	48

H写本の特徴は、３人称複数主格代名詞の語形が５つ観察されることである。H写本と同じく南東部方言と結び付きが指摘されるD写本やJ写本と比べると、２つの写本とは異なり、H写本では*hig*が比較的高い頻度で現れる。

2.8 London, British Library, Harley 3271写本

Harley 3271写本（h写本）は11世紀初頭に製作された写本である（Ker 1957: 309; Doane 2007: 25）。Porter（2002:38）はこの写本のアビンドン（Abingdon）またはカンタベリーとの関連を示唆する一方、Gneuss and Lapidge（2014: 357）は、この写本の製作地をウィンチェスター（Winchester）とする。この写本の『文法』は２人の写字生によって書かれたものである。以下がh写本における３人称複数主格代名詞の分布である。

表８　h写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hy*	対応箇所なし
228	4	1

h写本では標準的な語形である*hi*が228例使用されている。それに対して、他の写本で観察される*hig*は使用されていない。変異形として*hy*が４例使用されている。前述の通り、この写本は２人の写字生によって書かれたものであるが、２人は共に*hy*を使用している（第１写字生の使用箇所はf.40r22で、第２写字生のそれはf.63r14、f.65r22、f.81r14である）。

2.9 London, British Library, Royal 15 B.xxii 写本

Royal 15 B.xxii写本（R写本）は、11世紀後半の写本である（Ker 1957: 335; Doane 2007: 47）。他の写本とは異なり、この写本は、行間注解のようにラテン語（lemmna）に対する古英語訳（interpretamenta）の多くが行間に書かれていることで知られている。注意すべきことは、すべての古英語が行間に書かれている訳でなく、本文中に書かれている古英語もあることである。なお、ラテン語に対する行間の古英語訳はf.3r6のラテン語 *a domo* に対する古英語訳*fram huse*から散発的に始まり、f.8vから行間注解が集中的に施され始める。古英語訳が行間に施されない場合、他の写本と同じく、本文でラテン語と古英語が並列に配置されている。表９はR写本における３人称複数主格代名詞の分布を示す。

表９　R写本における3人称複数主格代名詞の分布

hi	*hig*	対応箇所なし
225	6	2

R写本では*hig*が６例確認できるが、いずれの例も行間ではない本文に書かれた古英語の例である。行間に施された古英語を読むと、３人称複数主格代名詞はすべて標準的な語形である*hi*が使用されている。このことは、それ

が写字生自身の言語であるかどうかという問題は別として、本文と行間注解を共に書き写した写字生が、代名詞の選択において行間では*hi*を一貫して使用し、本文と行間では言語の介入の度合いが異なることを示す。[21]

３．結び

本稿では、アルフリッチの『文法』の11世紀主要写本９つにおける３人称複数主格代名詞の分布を調査し、標準的な語形*hi*と共に現れる非標準的な語形*hig*、*hy*、*hyg*、*heo*、*hyo*の頻度を示した。本稿の調査で明らかになったことは、６つの代名詞の語形の現れ方は写本によって異なることである。*Hi*は調査対象となるすべての写本で使用される。このことは、*hi*がアルフリッチの『カトリック説教集』（*Catholic Homilies*）に見られる「古英語標準語」の語形であることを考えると驚くべきことではない。[22] *Hig*は７つの写本で使用され、特にU写本とC写本で高い頻度で現れる。また、*hy*は５つの写本での使用が確認された。その他の語形*heo*、*hyg*、*hyo*の出現頻度は極めて小さいものである。

本稿で明らかにした非標準的な語形は、写本が書き写された地域の方言要素を反映している可能性があるという点で興味深い。例えば、*heo*は南東部方言との結び付きが指摘されるD写本とH写本のみで使用される。C写本で１例現れる*hyg*は、注16で述べるように、ハンプシャー（Hampshire）のサジック（Southwick）修道院との結び付きがあるLondon, British Library, Cotton Vitellius A.xv写本で数多く現れる。また、カンタベリーとの結び付きが推定されるH写本に現れる*hyo*は、同じくカンタベリーで書かれた*Eadwine's Canterbury Psalter*で現れることが知られている。さらに、U写本で高い頻度で現れる*hig*はエクセターを含むイングランド南西部地域で製作された写本に広く見られる語形である。

『文法』の11世紀写本で現れる３人称複数主格代名詞の非標準的な語形の方言要素としての可能性を確かめるためには、11世紀に製作された他の写本における当該代名詞の網羅的、体系的な調査が必要である。今後の課題として、ウィンチェスター、カンタベリー、エクセター、ウスター（Worcester）、ロチェスター（Rochester）など製作された場所が明らかな写本をアンカー・テキスト（anchor text）として調査するだけでなく他の製作地不明の写本の調査も遂行する。[23] この調査によって、11世紀写本における３人称複数主格代名詞の実態が浮き彫りになると同時に、それを通して、各地域における『文法』の言語の伝播と受容の仕方がさらに明らかになることが期待される。

謝辞

本稿の執筆に際し、２名の査読者から有益な助言を頂いた。ここに深く感謝を申し上げる。なお、本稿での研究は日本学術振興会科学研究費採択研究課題「Aelfric's Grammarの11世紀写本間言語変異の研究」（研究課題番号19K00691）の助成を受けたものである。

注

1　古英語期の作品と写本については、Cameron, Angus. 'A List of Old English Texts' *A Plan for the Dictionary of Old English*. ed. Roberta Frank and Angus Cameron. Toronto, Buffalo: Centre for Medieval Studies, University of Toronto Press, 1973. pp.25-306を参照のこと。また、*Dictionary of Old English Corpus in Electronic Form*の'List of Texts'では、古英語期に書かれた全作品のリストが掲載されている。

2　Clemoes（1997: 169）は自身が編集した*Catholic Homilies: First Series*の変異形の記録方針について'Spelling variations, including variations in the forms of personal pronouns, are excluded, as are accents, and also minor copying errors and subsequent

scribal alteration if they are of no apparent textual significance'と述べている。

3　中英語方言学において代名詞は方言要素を示す言語項目として扱われている。後期中英語における代名詞の地域分布については、McIntosh, Angus, M. L. Samuels, and Michael Benskin. ed. *A Linguistic Atlas of Late Medieval English. Volume Two. Item Maps*. Aberdeen: Aberdeen University Press, 1986b. pp. 9 -39を参照のこと。古英語に関して、Campbell（1959: 289）とHogg and Fulk（2011: 199-200）は共に３人称複数主格代名詞の変異形を列挙しているが、筆者の知る限り、後期古英語期の３人称複数主格代名詞の変異形である*hig*や*hyg*に関する言及はない。

4　*The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition*シリーズのように写本毎に刊行本を公刊している作品もあるが、大抵の場合、基底写本以外の写本の言語情報は、刊行本の脚注で記録されるのが常であり、注２で言及したように、代名詞のように本文解釈上重要性が低いと見なされる項目は記録されないこともある。

5　古英語写本に非標準的要素が観察されることについてCampbellは次のように述べる。

Even when West-Saxon had become a well-established literary dialect, and was used as something of a standard written language, many manuscripts display a considerable non-West-Saxon elements in their orthography and inflections.

（Campbell 1959: 9）

6　古英語写本で観察される非標準的要素を特定の地域に帰することの困難さについてCampbellは次のように述べる。

Of West-Saxon we have considerable knowledge, but again we have no means to define its limits of internal inconsistencies. We can sometimes say that a given development is found at a known center, but we cannot from this be sure of the extent of the area to which the change was proper, or even that the centre, at which the manuscript displaying the change was written, itself lay within the area.

（Campbell 1959: 11 下線部は筆者による）

本稿は、『文法』の写本が製作された地域に留意しながら、３人称複数主格代名詞の非標準的な語形の分布に写本間の違いがあるか、また、その地域で書かれた他の写本にも同様の非標準的な語形が広く共通して観察されるか概観することを目的とする。

7　この調査方法は、Gneuss（1997）がBritish Library, Cotton Tiberius A.iii写本の各作品の言語におけるケント方言要素を調査する際に提案する方法である。ただし、Gneussはこの手法がケント方言以外の地域で書かれた写本の言語分析に適用可能かどうかは述べていない。

8　本稿で扱う３人称複数主格代名詞の非標準的な語形について、それが書記上の変異形か、それとも、当時の話しことばを反映したものかという疑問が提起されて然るべきであるが、本稿では、McIntosh et al.（1986a: 6）に従い、書記上の変異形と仮定して調査を遂行した。

9　Zupitzaの『文法』本文で３人称複数主格代名詞が使用される箇所は以下の通りである（/の後の数はページの行数を示す）。

p.2/18, p.2/25, p.3/1, p.3/7, p.5/13, p.5/17, p.6/2, p.6/7, p.6/7, p.6/14, p.9/17, p.15/1, p.15/15, p.18/1, p.18/20, p.19/17, p.20/4, p.24/5, p.24/6, p.25/9, p.25/10, p.25/10, p.25/11, p.25/12, p.26/10, p.26/10, p.26/15, p.26/15, p.34/7, p.35/13, p.38/16, p.43/11, p.55/6, p.80/6, p.80/12, p.81/4, p.83/1, p.87/13, p.92/14, p.93/3, p.93/15, p.94/11, p.96/2, p.96/7, p.97/2, p.97/9, p.99/17, p.104/7, p.104/8, p.105/4, p.108/3, p.108/19, p.108/19, p.109/7, p.109/11, p.109/19, p.109/20, p.110/7, p.110/8, p.110/9, p.110/11, p.110/12, p.113/4, p.113/14, p.116/7, p.117/6, p.117/12, p.117/13, p.118/10, p.120/8, p.120/9, p.120/10, p.122/11, p.122/13, p.123/9, p.123/10, p.127/11, p.127/16, p.130/10, p.130/16, p.131/1, p.131/5, p.131/9, p.131/14, p.131/17, p.132/2, p.132/9, p.132/13, p.132/18, p.133/3, p.133/8, p.133/13, p.134/1, p.135/17, p.135/18, p.136/1, p.136/1, p.136/3, p.136/13, p.136/17, p.140/1, p.140/4, p.140/9, p.140/15, p.140/18, p.141/2, p.141/5, p.141/11, p.142/1, p.142/6, p.142/10, p.142/15, p.143/3, p.143/11, p.143/18, p.145/5, p.145/7, p.145/10, p.147/4, p.147/12, p.147/15, p.147/19, p.148/3, p.148/6, p.148/11, p.148/14, p.148/19, p.149/5, p.149/9, p.149/14, p.149/18, p.150/1, p.150/6, p.150/10, p.151/20, p.152/2, p.152/3, p.157/14, p.157/14, p.158/2, p.158/3, p.172/6, p.173/1, p.191/6, p.193/6, p.199/2, p.199/2, p.199/7, p.200/1, p.200/10, p.200/14, p.201/2, p.201/12, p.202/3, p.203/3, p.204/8, p.205/13, p.206/5, p.206/7, p.206/8, p.206/8, p.208/6, p.208/14, p.208/15, p.209/7, p.209/14, p.211/8, p.211/5, p.213/7, p.214/11, p.214/12, p.224/13, p.227/10, p.229/6, p.229/6, p.232/14, p.235/13, p.241/9, p.242/7, p.249/3, p.249/3, p.250/17, p.251/5, p.251/9, p.253/3, p.254/5, p.254/5, p.254/6, p.254/14, p.254/15, p.254/15, p.254/16, p.256/9, p.257/10, p.259/2, p.259/4, p.259/3, p.259/10, p.259/12, p.259/15, p.260/11, p.261/6, p.265/2, p.266/3, p.266/4, p.266/4, p.266/6, p.267/7, p.267/11, p.268/13, p.268/13, p.270/18, p.271/5, p.273/11, p.274/1, p.274/2, p.274/6, p.274/7, p.274/11, p.274/12, p.274/14, p.275/1, p.276/12, p.277/12, p.277/13, p.279/14, p.279/16, p.279/20, p.280/8, p.280/11, p.293/3, p.293/6, p.294/11

10 『文法』のテキストは16の写本に現存する。そのうち、11世紀に書かれた写本数は13であるが、以下に示す４つの写本は断片（fragment）であり、テキストの分量が非常に小さいため、本稿の調査対象から除外した。

Bloomington, Indiana, Lilly Library, Additional 1000（formerly Sigmaringen）
London, British Library, Harley 5915 ff.8-9
London, British Library, Royal 12 G.XII ff.2-9 and Oxford, All Souls College, 38 ff.1-2
Paris, Bibliothèque Nationale, Anglais 67

なお、Bloomington, Indiana, Lilly Library, Additional 1000写本（Ker 384; Gneuss and Lapidge 796; Zupitzaの略語ではS写本）はKerの*Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* p.455のSigmaringen写本である。Doane（2008: 1）によれば、この写本は、1961年にインディアナ大学がHerbert Reichnerから購入したものであり、現在、インディアナ大学 Lilly Libraryに所蔵されている。また、レイアウト、文字のスペース、文字の形から、この写本はLondon, British Library, Harley 5915 ff.8-9とかつて同じ写本であったことが示唆さ

れている。

11　O写本は『文法』の基底写本であるが、一部テキストに欠落箇所や写字生による誤り（scribal errors）がある。この理由から、ZupitzaはO写本の読みを補充、修正し、該当箇所を脚注で提示する。興味深い例として、255ページ12行目にある*gehyrenne*がある。この屈折不定形は、O写本では*gehyrende*と書かれている。

12　93ページ15行目の箇所については、U写本とC写本でも欠落しているが、その他の６つの写本すべてで*hi*の語形が使用されている。

13　刊行本で３人称代名詞複数主格形の語形*hig*が使用される箇所は以下の通りである。

p.80/6, p.81/4, p.97/9, p.104/7, p.104/8, p.105/4, p.108/3, p.108/19, p.108/19, p.109/7, p.109/11, p.110/9, p.261/6

14　Cross（1996）の刊行本に基づく筆者の調査によれば、３人称複数主格代名詞として*Gospel of Nichodemus*では*hig*が105例、*hyg*が１例、*Vindicta Salvatoris*では*hig*が42例使用され、アルフリッチの作品で標準的な語形である*hi*は全く使われていない。

15　*Dictionary of Old English Web Corpus*で*hig*を検索すると、*hig*がイングランド南西部で製作された写本と関連がある印象を受ける（2023年11月19日検索）。例えば、*hig*の語形を散文で検索すると2122例あり、そのうち794例は*West Saxon Gospels*からの引用である。*West Saxon Gospels*の基底写本はCambridge, Corpus Christi College, 140写本であるが、f.45vにあるcolophonから、この写本のplace of originはイングランド南西部サマセット（Somerset）のバース（Bath）とされている（Liuzza 1994: xxvi）。また、*hig*を多用する作品として、*The Lambeth Psalter*がある。Gneuss and Lapidge（2014: 413）は*The Lambeth Psalter*を収録するLondon, Lambeth Palace Library, 427写本のplace of originをSW Englandとする。*Hig*が南西部地域に由来を持つ写本に多く観察される一方、カンタベリーとの関連が指摘されるBritish Library, Cotton Vespasian D.xii写本（*Monastic Canticles; Hymns*）やBritish Library, Cotton Tiberius A.iii写本（Ælfric's Colloquy; Regularis Concordia）でも少数例ではあるが確認されることは事実である。*Hig*の方言要素としての可能性を探求するためには、今後の11世紀に製作されたすべての写本における３人称複数主格代名詞の網羅的、体系的な調査が待たれる。

16　*Dictionary of Old English Web Corpus*の検索結果によれば、３人称複数主格代名詞としての*hyg*の語形の出現は各作品においてきわめて散発的なものであるが（2023年11月19日検索）、*hyg*が方言要素としての可能性を帯びていることは、*Gospel of Nichodemus*と*Vindicta Salvatoris*の異写本の比較から明らかである。Cambridge, University Library, Ii.2.11写本とは別に、*Gospel of Nichodemus*は12世紀後半に製作されハンプシャーのサジック修道院との結び付きがあるLondon, British Library, Cotton Vitellius A.xv写本に、*Vindicta Salvatoris*は11世紀後半にエクセターで製作されたCambridge, Corpus Christi College 196写本に現存する。筆者の調査によれば、前者の写本では３人称複数主格代名詞として*hig*が６例、*hy*が25例、*hyg*が80例使用されている。*hy*と*hyg*の語形については、同じ写本に収録されている*Solomon and*

*Saturn*でも現れる。それに対して、後者の写本に現存する*Vindicta Salvatoris*では*hig*が37例、*hyg*が４例確認された。

17　この箇所におけるD写本の記述の一部は市川（2022）に依拠する。

18　この箇所におけるJ写本の記述の一部は市川（2021）に依拠する。

19　この箇所におけるH写本の記述の一部は市川（2020）に依拠する。

20　H写本ではZupitza 254ページ15行目の箇所（f.63v5）で*hit*が使用されている。３人称中性単数主格代名詞であるこの語形は表の数値に含まれていない。

21　12世紀初頭に作成されたCambridge, Trinity College, R. 9.17（819）（T写本）は『文法』を含む写本として知られている。その製作時期ゆえに本稿の調査に含まれないこの写本は、テキストの一部がR写本のように行間注解で書かれている（Ker 1957: 134）。R写本の写字生の本文と行間の言語に対する態度をさらに明らかにするためには、R写本の言語自体の調査のみならず、T写本の言語の調査も必要であろう。

22　アルフリッチの代表作である『カトリック説教集』では３人称複数主格代名詞の語形は*hi*が標準である。筆者が*Dictionary of Old English Web Corpus*で検索したところ、『カトリック説教集』では*hig*、*hyg*、*hyo*の使用例は確認されなかった（2023年８月29日検索）。確かに、『カトリック説教集』のファーストシリーズ（London, British Library, Royal 7 C xii写本）で*hy*が２例使用されているが、アルフリッチがテキストの改訂を行ったとされるCambridge, University Library, Gg.3.28写本の対応箇所を確認すると、いずれも*hi*に書き換えられている（f.5v2, 36v26）。

23　Anchor textとは“texts that can be associated with definite places or areas on non-linguistic grounds”（McIntosh, Samuels and Benskin 1986a: 9）と定義されるテキスト、作品のことである。

参考文献

一次資料

Oxford, St. John's College 154
https://digital.bodleian.ox.ac.uk/objects/5836cb03-a87b-40b8-bb55-7bd438cdcd48/surfaces/e40dc386-c11c-4159-8963-438b185b0de4/

Cambridge, University Library, Hh.1.10
https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/MS-HH-00001-00010/1

Cambridge, Corpus Christi College, 449
https://parker.stanford.edu/parker/catalog/bq166fm4860

Durham, Cathedral Library, B.III.32
Keffer, Sarah Larratt. '120. Durham Cathedral Library B.III.32 "The Durham Hymnal," Glossed in OE; Ælfric's "Grammar" [Ker 107, Gneuss 244]' *Anglo-Saxon Manuscripts in Microfiche Facsimile. Volume 14. Manuscripts of Durham, Ripon, and York*. Keffer, Sarah Larratt, David Rollason and A.N. Doane. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2007. pp.59-81.

London, British Library, Cotton Faustina A.x
https://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?index=0&ref=Cotton_MS_Faustina_A_IX

London, British Library, Cotton Julius A ii. http://www.bl.uk/manuscripts/ FullDisplay.aspx?index=0&ref=Cotton_MS_Julius_A_II

London, British Library, Harley 107 https://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Harley_MS_107&index=36

London, British Library, Harley 3271 https://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?index=147&ref=Harley_MS_3271

London, British Library, Royal 15 B.xxii https://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Royal_MS_15_B_XXII&index=43

Zupitza, Julius. *Ælfrics Grammatik und Glossar*: Erste Abteilung, Text und Varianten. Sammlung englischer Denkmäler in kritischen Ausgabe1. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1880.

二次資料（電子媒体）

Dictionary of Old English Web Corpus https://tapor.library.utoronto.ca/doecorpus/

Healey, Antonette diPaolo, Joan Holland, David McDougall, Ian McDougall, and Xin Xiang. *The Dictionary of Old English Corpus in Electronic Form, TEI-P5 Conformant Version, 2009 Release*. Toronto: DOE Project 2009, on CD-ROM.

二次資料（印刷媒体）

Cameron, Angus. 'A List of Old English Texts' *A Plan for the Dictionary of Old English*. ed. Roberta Frank and Angus Cameron. Toronto, Buffalo: Centre for Medieval Studies, University of Toronto Press, 1973. pp. 25-306.

Campbell, Alistair. *Old English Grammar*. Oxford: Clarendon Press, 1959.

Clemoes, Peter. ed. *Ælfric's Catholic Homilies: the First Series: Text*. Early English Text Society Supplementary Series, no. 17. Oxford: Oxford University Press, 1997.

Cross, J. E. ed. *Two Old English Apocrypha and their Manuscript Source: 'The Gospel of Nichodemus' and 'The Avenging of the Saviour'*. Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 19. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

Doane, A. N. ed. *Anglo-Saxon Manuscripts in Microfiche Facsimile. Volume 15. Grammars. Handlists of Manuscripts*. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2007.

Doane, A. N. '14. Bloomington, Indiana, Lily Library, Additional 1000（formerly Sigmaringen）Fragment of Ælfric's "Grammar"（with B.L.Harley 5915, ff.8-9［277］）［Ker 384 & Supp., Gneuss 441; cf. Ker 242］*Anglo-Saxon Manuscripts in Microfiche Facsimile. Volume 16. Manuscripts Relating to Dunstan, Ælfric, and Wulfstan: the "Eadwine Psalter" Group*. Lucas, Peter J. and Jonathan Wilcox. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2008. pp. 1-3.

Gameson, Richard. *Manuscript Treasures of Durham Cathedral. with Contribution by A. I Doyle, John McKinnel, David Rollason, and Lynda Rollason and a Foreword by the Dean of Durham*. London: Third Millennium Publishing, 2010.

Gneuss, Helmut. 'Origin and Provenance of Anglo-Saxon Manuscripts: the Case of Cotton Tiberius A.III.' *Of the Making of Books: Medieval Manuscripts, their Scribes and Readers: Essays Presented to M.B. Parkes*. ed. P.R. Robinson and

Rivkah Zim. Ashgate: Scolar Press, 1997. pp. 1-48.

Gneuss, Helmut. 'Einleitung' Zupitza, Julius. ed. *Ælfrics Grammatik und Glossar*: Erste Abteilung, Text und Varianten. Sammlung englischer Denkmäler in kritischen Ausgabe 1. Berlin:Weidmannsche Buchhandlung, 1880; repr., ed. Helmut Gneuss, Hildesheim: Weidmann, 2003. pp.v-xviii.

Gneuss, Helmut and Michael Lapidge. *Anglo-Saxon Manuscripts: A Bibliographical Handlist of Manuscripts and Manuscript Fragments Written or Owned in England Up to 1100*. Toronto: University of Toronto Press, 2014.

Gretsch, Mechthild. 'Ælfric, Language and Winchester' *A Companion to Ælfric.（Brill's Companion to the Christian Tradition: A Series of Handbooks and Reference Works on the Intellectual and Religious Life of Europe, 500-1700）Volume 18*. ed. Magennis, Hugh and Mary Swan. Leiden,
Boston: Brill, 2009. pp. 109-137.

Hogg, Richard M. and R. D. Fulk. *A Grammar of Old English. Volume 2: Morphology*. Chichester: Wiley-Blackwell. 2011.

Keffer, Sarah Larratt. '120. Durham Cathedral Library B.III.32 "The Durham Hymnal," Glossed in OE; Ælfric's "Grammar"［Ker 107, Gneuss 244］' *Anglo-Saxon Manuscripts in Microfiche Facsimile. Volume 14. Manuscripts of Durham, Ripon, and York*. Keffer, Sarah Larratt, David Rollason and A.N. Doane. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2007. pp. 59-81.

市川　誠「アルフリッチの『文法』Harley 107写本の言語」菊池清明、岡本広毅編『中世英語英文学研究の多様性とその展望 吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集』横浜: 春風社. 2020. pp. 76-90

市川　誠「アルフリッチの『文法』Julius A.ii写本の言語」『東京理科大学紀要（教養篇）』第53号（2021）: 211-224.

市川　誠「アルフリッチの『文法』Durham Cathedral Library B.III.32写本の言語」『東京理科大学紀要（教養篇）』第54号（2022）: 225-239.

Ker, Neil. *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon*. Oxford: Clarendon Press, 1957.

Laing, Margaret. 'A Linguistic Atlas of Early Middle English: the Value of Texts Surviving in More than One Version' *History of Englishes: New Methods and Interpretations in Historical Linguistics: Topics in English Linguistics 10*. ed. Risannen M. et al. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 1992. pp. 566-81.

Liuzza, Roy Michael. *The Old English Version of the Gospels: Volume One. Text and Introduction*. Early English Text Society o.s. 304. Oxford: Oxford University Press, 1994.

Lucas, Peter J. and Jonathan Wilcox. ed. *Anglo-Saxon Manuscripts in Microfiche Facsimile. Volume 16. Manuscripts Relating to Dunstan, Ælfric, and Wulfstan: the "Eadwine Psalter" Group*. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2008.

McIntosh, Angus, M. L. Samuels, and Michael Benskin. ed. *A Linguistic Atlas of Late Medieval English. Volume One. General Introduction, Index of Sources Dot Maps*. Aberdeen: Aberdeen

University Press, 1986a.

McIntosh, Angus, M. L. Samuels, and Michael Benskin. ed. *A Linguistic Atlas of Late Medieval English. Volume Two. Item Maps*. Aberdeen: Aberdeen University Press, 1986b.

Porter, David W. ed. *Excerptiones de Prisciano: the Source for Ælfric's Latin-Old English Grammar. Anglo-Saxon Texts 4*. Cambridge: D. S. Brewer, 2002.

Treharne, Elaine M. "Producing a Library in Late Anglo-Saxon Exeter, 1050-1072" *The Review of English Studies*. Vol. 54（2003）: 155-72.

Zupitza, Julius. *Ælfrics Grammatik und Glossar*: Erste Abteilung, Text und Varianten. Sammlung englischer Denkmäler in kritischen Ausgabe 1. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1880; repr., ed. Helmut Gneuss, Hildesheim: Weidmann, 2003.